

北欧の3カ国を訪ねて（2018（平成30）年6月）

学生の中長期の留学促進の協議・調査等のため、5月下旬にフィンランドを訪問することとなり、折角の機会を活用して、スウェーデンとデンマークにも立ち寄りました。

2019年は、フィンランドと日本の外交関係樹立100周年に当たります。首都ヘルシンキ市では、山本条太大使及び同国「国会議員日本友好連盟」会長さんにもお会いすることができました。山本大使からは、本学が保健福祉、情報、デザインの領域で様々な取組を推進している中で、「いずれもフィンランドが世界の最先端を走っている分野であり、今後の実り多い交流が期待できる。」「教育研究に止まらず、フィンランドの実践的な産学官連携を良いお手本として、ビジネスへと繋げて欲しい。」といった激励のお言葉をいただきました。また友好連盟会長からは、「デザイン分野ではフィンランドの方が進んでいるものの、高齢者対策や食品・栄養分野など、フィンランドが日本から学ぶべきものは多い。」「飛行機でわずか9時間と、ヨーロッパの中でもフィンランドは日本から最も近い。」など、交流発展へ向けた熱い思いを伺いました。

私にとって二度目のフィンランド訪問でしたが、運良く好天が続き、ヘルシンキ市でも、交流大学がある地方都市のラハティ市でも、自然溢れる市内を満喫でき、爽快な気分になりました。中心市街地にも遊歩道や自転車道が見事に整備されており、多くの市民が楽しそうに散策しているのを見て、とても羨ましく思いました。またこれは、訪問した北欧の3カ国すべてに共通でした。

スウェーデン農業科学大学は、同国有数の名門大学であり、全国に4つのキャンパスがあります。同国の一番南西の端、マルメ市近郊のアルナープ・キャンパスには、本学の教員と一緒に、保健福祉学やデザイン学等での学際的な国際共同研究を進めている研究者がいることから、今後の本学との交流促進に向けた意見交換を行いました。隣接する農場を含め、広大な敷地には北欧風の建物が点在し、森や林の中に大学がある、という感じでした。このキャンパスの大きな特長は、学生とほぼ同数の教員がいることです。しかも教員の多くは、教育ではなく研究が本務であり、「自分を取り組みたい研究に没頭できる。」という誠に羨ましいお話でした。



マルメ市から最も近い国際空港は、隣国デンマークのコペンハーゲン空港です。間には海（オーレスンド海峡）がありますが、2000年にオーレスン橋と海底トンネルが開通して、スウェーデン・デンマーク間を、列車や自動車で移動できるようになりました。距離も所要時間も、ちょうど瀬戸大橋と同程度であり、岡山県と香川県の交流状況をお考えいただくと、いかに便利で近くになったか分かると思います。ただし、北欧の方は「国家間移動」になりますので、さぞかし大変ではないかと想像していましたが、そんなことは全くなくて、私がいささか緊張して国際列車に乗車した際にも、隣町へいつも通り通勤・通学している、という気軽な感じで皆さん利用しておられました。国境近くの海面上には、風力発電用の巨大な風車が文字通り林立している様子を車窓から眺めることができ、「デンマークでは総発電量の40%以上を風力発電で賄っている。」という驚きの事実を、再確認することができました。

スウェーデンでの業務を終えた日の夜は、コペンハーゲン市で約20年ぶりに古い友人たちと再会できました。6名全員がクラシック音楽の楽器演奏者であるデンマーク人です。チボリ公園の縁により岡山県に何度か来訪され、ホームステイも含め非常に歓待されたことから、全員が熱心な「岡山ファン」となりました。メンバーのお宅でのホームパーティーの後に、この白夜の季節ならではの「森林浴」を体験しました。住宅地のすぐ裏に市民に開放されている大きな森林があり、遊歩道も長い距離で整備されています。午後8時でも、9時になっても、昼間とほとんど変わらない明るさの中で、皆でおしゃべりをしながら、また鳥を眺めながら、1時間から2時間ほど散策できます。家族や親しい友人と一緒に、まさに生活を楽しんでいる、そういった様子がよく分かりました。日本でも、このような暮らしができるようになりたいと思いました。